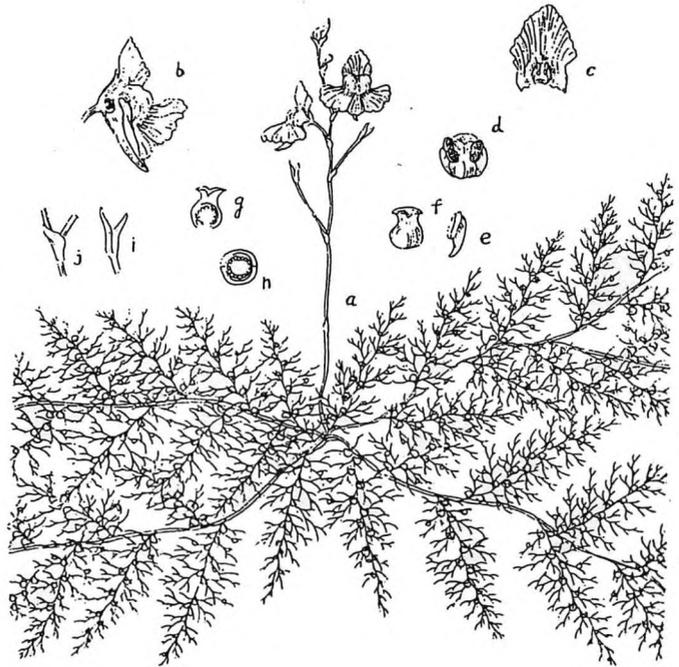


シャクジイタヌキモに就いて

佐藤安司

古く中島定雄氏により東京緑地計画彙報に収載せられたシャクジイタヌキモは、その後自生地の消滅により現在では幻の植物とされている。全彙報第九輯「武蔵野の植物」は本種と (*Utr. japonica*) を比較し、その主要な相違点に就き次のように述べている。「これはタヌキモに比し、全形大にして、花は更に大きくコダヌキモ (*Utr. intermedia*) より大で且つ假面部の橙色斑がタヌキモは條斑であるのにこれはボカシになっている。距はタヌキモでは下唇より短く三角形であるのに、これは下唇より長く (長さ8mm) 長三角形鈍端である。捕虫嚢はタヌキモと殆んど同様であるが、唯捕虫口周縁の毛状体が多い。コタヌキモとタヌキモの交配種であろうかと2~3年人工交配をして見たが殆んどタヌキモが優性の如く此の様なものが出ず、開花期は8-9月である。序文既記の中島定雄氏 (同氏は石神井三宝寺池畔に占居せらる。) に依り発見されたもので板橋区内石神井三宝寺池にのみ生育する事を確かめ茲にこの名を命名されたものである。」その後

大井博士の「日本植物誌」、高陽書院刊の「日本の植物」などに記事をみるが、原記載が不十分なものである為一般には認められていないようである。因みに当時三宝寺池にタヌキモと混生していたのはコタヌキモではなくヒメタヌキモであった由。タヌキモの仲間は生育環境によりさまざまに変化し異なった形態を示すので注意しなければならない。例えば戦前記録されたタヌキモの新種にムサタヌキモ (*Utr. yosezatoi*) と云うのがあり、コタヌキモやチコタヌキモのように泥生枝を出して捕虫嚢をつけるもので与世里盛春氏が千葉県下で発見し牧野博士が記載したが、標本は皇室へ献上されたとのことで見ることではできない。これと似たものにチョウシタヌキモと云うタヌキモの変異形が戦後知られており、これは浅水中にあって水底に附着生活をするもので、銚子市七



Utricularia siakujiiensis, Nakajima. (Sp. neu.)
 シャクジイタヌキモ (a)花を着けたる一部、(b)花冠断面、
 (c)花冠上唇並に雄蕊、(d)雄蕊並に雌蕊、(e)1つの雄蕊、
 (f)雌蕊、(g)同縦断面、(h)同横断面、(i)萼、(j)苞、
 (昭和10年8月27日 板橋区石神井三宝寺池にて採集)

ツ池の産地が有名だが、屏風岩付近に産するものにも泥生枝が見られたとのことである。この屏風岩上方の自生地ではムラサキミミカグサの白花 (所謂白花ミミカグサ) も発見されていて、ここの個体は花茎が濃い紫色を呈し、白花と良いコントラストをなして美しいものだったと聞くが今は残っていない。千葉県の下葉寺付近の池に見られたタヌキモにも泥生枝は観察されているがこの自生地は銚子の自生地と異なり安定して深い水深を保っていたと云うから大変興味もたれるが、今は絶滅してしまっているのではなからうか。日光戦場ヶ原の湿地帯にはヒメタヌキモに泥生枝を生じるものがあったとも聞いている。

さてシャクジイタヌキモであるが、三宝寺池の自生地は既に絶滅しているので今では幻の植物となっているが、

現在同名をもって一部で栽培されているものがあり、私も分与を受けて試作中だが花が咲かずとも確認できないでいる。戦前親しく自生地を観察された方の話ではシャクジタヌキモはきわめてよく開花したと云うことであるが、現存のものは今の処開花例を聞かない。但しその分岐力はきわめて目立つものがあり、知人は熱帯魚用のガラス水槽を用い、ワラの浸出液を定期的に注いで窓際に栽培した処、最初1本であったものが無数に分岐し、その年の末には数百個の冬芽を形成したと云う。千葉大学の園芸学部でシャクジタヌキモの名で残っていたものが、東京山草会員により増殖されたものであると聞いている。シャクジタヌキモに就いて詳しく御存知の方はぜひとも御教示頂ければ幸いです。1982-5-3

岐阜県のフサタヌキモ自生地に就いて

佐藤安司

日本に特産し、閉鎖花をつけるタヌキモとして有名なフサタヌキモ (*Utr. dimorphantha*) は過去岐阜県下からの自生は報告されていないが、昭和44年に名古屋食虫植物懇話会のメンバーによる調査で岐阜県北部の安食(あじき)に自生地が確認されているので報告しておきたい。自生地は本巢町及び高富町のほぼ中間に位置し山際に沿った水田かんがい用の用水路の湧水中に多量に生育していた。用水路は1m程の幅があり深さは50cm程のものであるが、両側が草木におおわれて日当りはきわめて悪く、また湧水により水温はごく低く保たれていた。その為か水路中に繁茂するフサタヌキモに捕虫囊は殆んど見られず、隣接する水田へ流出、生育している個体にわずかの捕虫囊と閉鎖花を確認したに過ぎない。



フサタヌキモ (岐阜市安食, 1969年)

用水路と云っても水の流れは殆んどなく、貯水的な働きの方が大きかったように記憶するが、昭和48~9年の間に近くに工場が出来、その為か水路の改修と清掃が行なわれて完全に消失してしまったのは何とも残念である。その後県下からの自生は報告されていないし、全国的に見ても自生地はごく限られておりタヌキモの間では最も貴重なものかと思う。栽培にあたってはムジナモと混生させて良好な発育を見ている。清水中に繁茂していたからと流水や有機質の少ない水中におくのは禁物でやはり普通のタヌキモと同様、水鉢に多量の土を入れ、ワラの浸出液でpHを弱酸性に保って栽培するのが好結果を生むようである。1982. 5. 5

文献リスト<1981-(3)>

- 沖 陽子・植木邦和. 種々の育成状態におけるホテイアオイの組織学的研究. 雑草研究 26: 291-297.
- 下田路子・鈴木兵二. 西条盆地(広島県)における休耕田の植生. *Hikobia Suppl.* 1: 321-339.
- 百瀬忠征. オオカナダモの高校生物実験への応用(続IV) —オオカナダモの根について—その2. 都生研会誌 No.17: 19-23.
- 矢野悟道. ヨシ群落の地下構造について. *Hikobia Suppl.* 1: 371-380.
- Kadono, Y. Habitats of Japanese *Potamogeton*: Abstract. *Verh. Internat. Verein. Limnol.* 21: 1497.
- Ohba, T. & H. Sugawara. *Über Synsystematik artenarmen Pflanzengesellschaften an extremen Standorten: Zosteretea marinae und Podostemonetea class. nov.* *Hikobia Suppl.* 1: 183-188.
- Satake, K., P. J. Say & B. A. Whitton. Use of X-Ray fluorescence spectrometry to study heavy metal composition of aquatic bryophytes. "Heavy Metals in Northern England: Environmental and Biological Aspects" (Say, P. J., & Whitton, B. A. ed.): 147-152. University of Durham, Dept. of Botany.

(次号につづく)